

<p><b>4日 (日)</b> レビ記 19章</p>	<p>「これら(ぶどう畑に落ちた実)は、貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない」(10節)、「目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない」(14節)、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」(18節)。19章の「愛神愛隣」規定には「隣人」が具体的に示されている。今日の主の日は、「隣人」と共に命を分かち合い、主を礼拝する日となるように。</p>
<p><b>5日 (月)</b> レビ記 20章</p>	<p>「あなたたちはわたしのものとなり、聖なる者となりなさい。主なるわたしは聖なる者だからである」(26節)。「聖なる者となれ」と繰り返される20章には「性に関する戒め」が何と多いことか。古の昔から同じことを繰り返してきている人間を想う。「細かな戒め」などなくても、神の愛を大らかに生きる「成熟した自由」。その自由を生きられた主イエスにならう者とされたい。</p>
<p><b>6日 (火)</b> レビ記 21章</p>	<p>「同僚の祭司たちの上位に立つ…者は、自分の父母の遺体であっても、近づいて身を汚してはならない」(10-11節)。祭司たちに「汚れ」を厳しく戒める教えの数々。主イエスの時代に祭司が「遺体」を嫌悪し、「遊女」や「障がい者」を遠ざけた理由がここにある。しかし主イエスはこれらの戒めを破棄し、真の意味で「聖なる者となる」生き方を示してくださった。</p>
<p><b>7日 (水)</b> レビ記 22章</p>	<p>「聖なるわたしの名を汚さぬよう、イスラエルの人々がわたしに奉納する聖なる献げ物に細心の注意を払いなさい」(2節)。「神の名を汚す」とはどういうことか。祭司たちはレビ記に記された言葉を忠実に守ろうとし、主イエスを「神の名を汚している！」と非難して十字架で処刑した。しかし神はその主イエスこそを「聖なる献げ物」として受け取られたことを覚えてたい</p>

<p><b>8日</b> <b>(木)</b></p> <p>レビ記 23章</p>	<p>「これは、わたしがイスラエルの人々をエジプトから導き出したとき、彼らを仮庵(かりいお)に住ませたことを、あなたたちの代々の人々が知るためである」(43節)。イスラエルの礼拝は、彼らがたどってきた歴史を想起するもの。愚かな失敗をくり返してきた彼らに、神がどれだけ憐れみと忍耐をもって共に歩んでくださったか。その大きな恵みを心に深く刻む礼拝。</p>
<p><b>9日</b> <b>(金)</b></p> <p>レビ記 24章</p>	<p>「アロンは主の御前に、夕暮れから朝まで絶やすことなく火をともししておく。これは代々にわたって不変の定めである」(3節)。夜の間に、幕屋の外では祭壇の火が絶えることなく燃やされて献げ物の煙が天に昇り、幕屋の中では純粋なオリーブ油のともし火がともされ続けた。なぜならイスラエルを導く神は、「まどろむことなく眠ることがない」から(詩編121・4)。</p>
<p><b>10日</b> <b>(土)</b></p> <p>レビ記 25章</p>	<p>「この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それがヨベルの年である」(10節)。「もし同胞が貧しく、自分で生計を立てることができないときは、…その人を助け、共に生活できるようにしなさい」(35節)。「ヨベルの年」は主の解放が宣言され、自分の手にある「富」を神に感謝してお返しし、隣人と分かち合う時。わたしの信仰が厳しく問われる時。</p>
<p><b>11日</b> <b>(日)</b></p> <p>レビ記 26章</p>	<p>「わたしは主である」(2節)、「主が…御自分とイスラエルの人々との間に定められた掟と法と律法である」(46節)。主がモーセを通して与えられた掟の最初と最後は、「わたしは主である」という神の宣言で締めくくられる。主がわたしたちに託された掟は、わたしたちが「イスラエルをエジプトから救い出した神こそがわが主である」と告白するために必要なもの。</p>